

特集 この商品が生まれるまで



成宮 咲来さんの『さくらハート』誕生から学ぶ 商品プロデュースの6ステップ

工房集のメンバーの表現から生み出されるものをどのように製品化していくのか、私たちがお伝えします。
社会福祉法人みぬま福祉会 志村桂子、山内樹美子



障害から常同的な手もみ行動が多く、手を自ら意図的に使うことに大きな困難を抱える成宮咲来さん。アトリエで自由に動き回りながら、手にした色鮮やかな銅線をていねいに丸め塊をつくります。その塊は、複数の色がまざり、見る角度、見る人によって印象が違って見える不思議なものです。咲来さんの気持ちが込められているこの作品を「さくらハート」と名付けました。銅線は彼女の手の動きや思いをふんわりと受け止めてくれます。さくらハートは、「障害が重くても、仕事を保障しよう」「一人ひとりに合った仕事を見つけない」とそんな発達保障の視点をもとに、従来の仕事の枠をこえて、新たな価値を創造しています。

19 手をつなぐ 2019.6



全国手をつなぐ育成会連合会 「手をつなぐ」2019年6月号にて『さくらハート』誕生までのエピソードを紹介していただきました。

一、 咲来さんの手の 動きに対する気づき

咲来さんは、目で見て気に入ったものや触って心地良いものを手にします。みぬま福祉会に入所後、手の操作性を考慮したいという思いから、和紙作り（牛乳パックのビニール剥ぎ）の仕事に取り組みだしました。何年も同じ作業を繰り返すなかで、いろいろなビニールの剥ぎ方ができるようになり、枚数も多くこなせるようになっていきました。



二、 銅線で作成されたものと 商品化への発案

さくらハートをどのような形で社会に発信していくかを議論し、はじめは作品展等で展示をしていましたが、もっと、さくらハートの作品のかわいらしさが伝わり、手にしたときに形が崩れないものできないかと考え、樹脂にとじこめるということを思いつきました。当初はペーパーウエイトなどを作っていました。小さなさくらハートはアクセサリーにできるのではないかと考え、職員がネックレス、イヤリング、ファスナーホルダーなどを作り出していきました。

二、 咲来さんの手の動きや思いの確認・アセスメント

障害が重いと自ら達成感を得るのは難しい。けれど、周りからの声かけがあれば、自分の行動の意味を理解することができる。咲来さんにもっと自分のしていることや達成感を感じる仕事をしてもらいたい——。引き続き、職員は、手の操作性を生かした仕事を模索しました。新聞、和紙、粘土、紐などを手渡して

もうまく形にならなかつたり、手にしても咲来さんには感触が合わないのか長続きしなかつたり……。職員にとっても悩む日々が続きました。ある日、色つきの銅線を見つけた職員が、咲来さんに渡してみると、咲来さんは銅線を手放すことなく、独特の握り方をし、しばらくすると、ふんわりとした塊を作り上げました。



四、支援体制の検討

さくらハートの評価とともに、咲来さんは仕事場面で積極的な姿が見られるようになりました。10センチくらいに切った複数の銅線を容器に入れると、自ら容器に手を入れて銅線を握るようになります。そのように本人が主体的に選ぶことも大切な取り組みとして行っています。また、咲来さん自身が銅線を握りたくないときは無理強いはいしないで、咲来さん自身から、やりたいという気持ちになるまで待つことを大切にしています。



五、デザイン・製造関係の外部専門家・事業者とのやりとり

大きなさくらハートはそのまま作品として展示したりし、小さなさくらハートは、商品としてアクセサリにしています。商品をイメージし、新色や季節の色、購入したいという人の要望の色合いを考慮した銅線を職員側で選んで咲来さんに渡すこともあります。

また、商品化は最初は職員が手作業で一つひとつ加工して作っていましたが、時間が経過すると樹脂が変色してしまうことや、加工する職員に負担が集中すること、商品としてさらに魅力的なものにしたいという職員の願いも重なり、さくらハートをブラッシュアップし、商品と

してのクオリティを高めるための検討を進めることにしました。

外部専門家のC社と連携し議論を重ね、さくらハートのブランディングをしました。消費者ターゲット像を作り出し、その人が買うであろうアクセサリ作りを行うため、パッケージやアクセサリパーツ等、外部委託することにしました。障害が重い人が作った作品を売りにするのではなく、「素敵な商品を手にとってみたら障害のある作家さんだった」となるよう、売り方出し方、見せ方見られ方も議論し、組織の中でみんなで作り上げました。



六、商品の完成と宣伝広報、 咲来さんへのフィードバック、 社会へのフィードバック

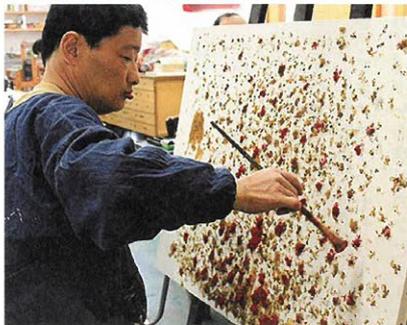
工房集のホームページによる宣伝や、地域の各所での作品展や委託販売を行うことで、社会に発信しています。今ではミュージアムショップやセレクトショップに卸せるようになりました。さくらハートを通して、周囲の反応が大きく変わりました。大変な子という見方をしていた親御さんがわが家の宝だと喜んでいらっしやいます。言葉のない咲来さんですが、見学者が来ると、動き回るのを止め自分の作品の前に立って、「私の作品です」と言わんばかりの表情をしている姿が見られるようになりました。



新しい価値観を創るためにいろいろな人が**集**まる場所



工房集は、アトリエ、ギャラリー、ショップ、カフェの4つの機能を持ち、社会福祉法人みぬま福祉会を利用するメンバーの表現プロジェクトを社会につなげるための活動拠点として、2002年に開設されました。表現活動は、1994年頃、既存の仕事に合わなかった一人のメンバーをきっかけに、障害の重い人たちの仕事づくりを模索しつづけたことから始まりました。その表現方法は絵画、織り、ステンドグラス、木工、写真、書、詩、漫画、紙粘土…そのどれにも当てはまらない独自の作品まで多種多様です。



もともと美術が得意な人を集めたものではありません。好きなこと、得意なこと、その人にしかできないことを引き出す日々の支援の延長上に生み出された多くの表現が、本人だけでなく、メンバー、職員、家族などの周りの人の意識を変え、固定観念を覆しています。現在は、法人全体で11のアトリエを中心に150名ほどが仕事としてさまざまな表現を生み出し、国内外での展覧会への出展や、企業との協働など、活動が多岐にわたっています。



工房集
埼玉県川口市木曾呂1445
TEL 048-290-7355
FAX 048-290-7356
<http://kobo-syu.com/>